

Title	研究者の可能性と限界を教えられて
Sub Title	
Author	我部, 政明(Gabe, Masaaki)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2009
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.82, No.11 (2009. 11) ,p.190- 191
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特別記事：松本三郎先生追悼記事
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20091128-0190">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20091128-0190</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 研究者の可能性と限界を 教えられて

松本三郎先生にお目にかかったのは、慶應義塾大学大学院の修士課程に入学したときでした。そして、博士課程に進学して松本先生のもとで研究を続けていただき、研究者の道を進む機会を得ることができました。さらに、在フィリピン日本大使館にて外務省専門調査員として調査研究と外交の現場を経験することが、先生の推薦を得て実現しました。研究者としての私が今いるのは、こうした過程の結果なのです。私にとつての松本先生は、恩師という表現がびつたりします。

私が院生になったころ、先生は、慶應義塾大学の特徴となつていた地域研究の牽引者的役割を担い、東南アジアの国別研究、ASEANのような地域全体を視野に入れ、同地域への米国や中国の関与などの研究をなさっていました。また、埼玉県志木にある慶應義塾志木高校の校長をなさっており、若者の教育を真剣に考えていたのだと思います。研究と教育の両方で活躍しているときに、

東南アジアのことをほとんど勉強したことがないまま大学院試験で及第点にどうにか達した私を、先生は修士課程の学生として引き受けてくれたのです。恐らく、若者には可能性がある、と考えてくださったのだと思います。

七〇年代後半は、二つのオイルショックに挟まれて景気が大きく後退する一方で、日本の企業や資本そのものが海外へ展開しようとするときでした。大学院での入試では、確か一〇人の定員のところに多くの受験生が集まってきたように記憶しています。日本外交、国連、朝鮮半島、日本政治、選挙などに関心をいだく新入生のなかで、東南アジア研究を志したのは私一人だけでした。いつもと変わらぬ優しい態度で先生が接してくれたお陰で、自由に研究の方向を定めることができました。今思うと、勉強するうちに自分で自身の可能性の限界ぐらいいは気づくだろう、と考えていらしたのかもかもしれません。

先生のクラスの初日に、修士課程の一年目には多くの分野を勉強することになるが、厭わずに挑戦していきなさい、という趣旨のことを話していました。本をたくさん読んで目が充血するぐらいは何でもない、と。政治学の分野をまんべんなく勉強することが、将来の幅広い専

門性を獲得する素地となるのだ、と強調していました。残念ながら、私の目が赤くなることはありませんでした。先生が話していたことと同様なことを、大学院の新入生に話しています。

今の私は、大学院で指導をいただいた頃の先生の年齢とほぼ重なるようになりました。研究としてはおもに日米関係や安全保障を取り上げ、大学院にて博士号をめざす学生をも指導しています。そんな中、研究能力の基礎と思考の柔軟性を欠く学生にも出会います。当時の自分を見るようで、私自身、大学院に不向きの人だったのしか思えません。若者の可能性にかける教員の眼差しの大切さを、松本先生に教えていただいたようです。今ようやく、そのことに気づくようになってきました。可能性とその限界を私自身を知るようになるまで、先生の予想を超えて時間がかかったのだと思います。

琉球大学教授 我部政明

## 松本三郎先生に師事して

松本三郎先生が初めて塾の常任理事に就任された年に、私は修士課程の大学院生として先生の下で勉強を始めた。それ以来約三十年間、先生が研究、教育、学校行政の三本柱にそれぞれ卓抜した能力と無類のバランス感覚をもって取り組まれ、確固たる実績を刻んでいく姿を比較的間近で拝見することができた。後に自らも大学教員となったが、振り返ってみると、先生から直接に薫陶を受けた研究面の他にも、傍らで見聞きしてきた先生の考え方やスタイルの多くを意識、無意識のうちに取り入れ、それらをほとんど唯一のお手本としてなぞってきた自分に気づく。

特に、松本先生のゼミに院生のチューターとして参加していた六年間に、先生のゼミ生に対する接し方を通して学んだものは多い。先生は常に学生を多面的に捉え、それぞれの持ち味や強みを引き出そうとされた。ゼミ生個々について、勉強面はもとより、課外活動や学外での